

ドナ・ノビス・パツエンの歌

アメリカ 6 ヶ月の生活

櫻井 たか子

一九五四年度のフルブライト留学生として米国教育事情研究視察の目的で六ヶ月間過ごしました、アメリカでの生活について、思い出すまま記すことに致します。

◎東京——ワシントンD・C

八月二十五日羽田からノースウエストの飛行機で三十六名のグループが発致しました初めての飛行機の旅でしたのでいささか不安もありましたが、案ずる程のこともなく修学旅行のような楽しさで、青森県三沢飛行場、アラスカのアンカラジー空港等を経てシャトルで入国の手続きがあり、レントゲン写真や荷物の検査等も無事に通過していいよいよアメリカだと思いました。

アンカラジーで機上の食中毒事件があり、私は何ともなかったのですけれど、同行の先生方のうち大半がひどくお苦しみになって、病院で一晩手当を受けられたりして予定より

一日おくれてワシントンD・Cに到着致しました。ワシントンD・C（特別市）は御承知の通り米国の首府であります。西海岸のワシントン州とまぎらわしいので特にDCと致します。特に首府としての設計により営まれる美しいまちで、ここにオフィス・オヴ・エ

デュケーション (Office of Education) があり国際色ゆたかに世界各国（四十二ヶ国）から二五〇人の先生方が、相集い相寄ったのでその壮観は胸をうつものがありました。十四年程前に私が当時の東京女高師保育実習科に在学の頃、タイ国から留学生として勉強していらしたサワットさんがこの度やはりタイ国からこのプログラムに参加しておいでになって、奇遇を喜びあうと共につくづく世界は狭いと感じました。

ワシントンD・Cに滞在中、米国の教育について一般的講習があり、初等教育、中等学校、学校の英語教育、教育行政の三部にわかれます。

してそれぞれの共通の問題について話し合いを致しました。この間に約一週間はアメリカン大学のラングエジ・センターで英語も習いました。発音、文法等懇切に指導して下さいました。D・Cでは大たい地図をもって歩いたのですがある日持たずに出て、「このあたり」と思われるところまでわからなくなり、「アメリカン大学はどこでしょうか」と道ゆく婦人になつねたところ、電車にのって三、四十分も離れたところを教えて下さり変だと思いつつもやつと辿りつくと、ここは大学ではあるが「ラングエジ・センター」はさきの地点のすぐそばですとの事にやれやれと又ひき返しました。

道路の右側を通行する電車、自動車に、長い間待ったあげく、目的の方向に走り去るのは反対側の電車「あつ、しまった」と見送る事しばしば。

濃いグリーン色の郵便箱の立つまち角で、赤いポストを探したり、バス、電車にのる際、お金を運転手の席の傍にある函の中に、チャリオンチャリンと入れてから奥に進む事を忘れてほとんど行つてから気がついて入口にもどつ

てお金を入れるなど、習慣の違いもあるものです。ワシントンD・Cはちょうど東京の気候に似ているといわれておりますが、八月、九月はじめの日ざしはなかなか暑うございました。

在郷軍人大会のバレードも各州から思い思いに自慢の音楽隊を先頭に鮮かな行進、奇ばつな「だし」を繰りひろげて午後二時頃から夜あけの二時までえんえんと続くので根気よく観る人たちに感心してしまいました。

ここでいよいよ各グループが十二の大学に配されることが発表され、組分けがきまつて私はデトロイト市に行く事になりました。

任地に出発の前、だいぶ仲よくなった先生たちがそれぞれお国ぶりの余興を発表する事になり「タイレント・ショウ」と呼ばれて、ドイツの合唱、メキシコのダンスをはじめ、特色のあるプログラムが又楽しい一日でございました。日本からは、高知県の江草先生のとやかな「春雨」と粹な揃いの浴衣で手さばきも鮮かな「たんこぶしだんす」が好評でした。

ワシントンD・Cでは隣接のヴァージニア

州、フォールスチャーチに住む友達の家を訪れる事になり、夫妻とも在日の経験があるのでいろいろ気をつけて下さいました。

◎ワシントンD・Cデトロイト市

九月十八日に、私は十六人の先生方、(ドイツ、日本、各三人、キューバ、ギリシャ各二人、印度、オランダ、オーストリア、フィンランド、イタリヤ、ブラジル各一人)でミシガン州のデトロイト市ウエイン大学に向いました。

かねて聞き及んだブルマン式の寝台車、座席が手際よく寝台に組み直される列車で、ワシントンD・Cをたつとまもなく、この出来たての友達、ギターを奏でて「音楽の夕べ」となり、音楽は世界のことば」というわけで、ふつうにはアメリカの汽車旅行は至って静かなものですけれど、特別貸切のよう、歌うやら笑うやら、すっかり仲よしになつてしまいました。北へ北へと走つて夜が明ける頃、デトロイトに到着しますと、ウエイン大学からお世話をして下さる先生方がお出むかえ下さつて、すぐ歓迎朝食会に臨みまし

た。この時胸につける名札が自動車の形であったのでさすがに自動車工業の都市だと感心致しました。

何かにつけて女性がひきたてられますのは結構なのですが、度々新聞社からインタヴューがあり、全力をあげて応答にあたりますのではじめのうちはそれが済むとがっかりする程つかれました。

ウエイン大学はデトロイト市立の大学ですので街なかであり、学生たちも勤勉で活気がありました。私共はスチューデント・センターという、大学の寄宿舎に宿泊する事になりました。

このセンターには他に日本から三名の方が住んでおられ、看護学を研究なさる神谷豊子さんはそのお一人でした。日本語を話すと英語が上達しないとよく云われるのですけれどはじめのうちは、やはり英語ばかりでは頭の芯が疲れるようですので、精神衛生の為日本話も話しました。

ミス・マリオン・エドマンは、外国人留学生の面倒がゆきとどいて、おいでになりました。よく設備のととのった、ゼネラル・ライ

ブラリ(図書館)の四階の教室で毎週二回火木の午前中、「アメリカ学校生活」「アメリカ家族生活」の、二つの主題で、私達の撰んだ問題についてそれぞれの方面の権威の方をおまねきして特別研究がつづけられました。自動式のエレベーターは、ゆるゆるのぼるのでおくれそうになると階段をかけたのぼった方が早いという事もありました。

この他に十七名は各々の専門と関心によって、普通の大学の講義を聴講致しました。私は「幼稚園教育」ドクタ・モア、「比較教育学(各国教育制度)」ドクタ・エドマン等をとりましたが、ドイツに公立幼稚園がないと聞いて驚きました。フレイベルの国ですのに思いましたが「よいものを生んでも、守りそだててゆけないで残念です」とドイツの先生がいつておられました。こうした級は夕方からあって現職にある先生方が熱心に専攻しておいでになりました。

又、各自随時参観の出来る小学校をきめて頂き、私は市の北西部にあるフィツシャルド小学校に参りました。

ミシガン洲の公立小学校は全部幼稚園のク

ラスから始まっていて義務教育ではありませんがほとんどの五才児が幼稚園教育を受ける事が出来ます、クラスを午前午後にわけ少人数でゆきとどいた教育をといるのが建前とか二十五名位から三十名で中々大変だと思いました。それでも三時すぎ午後の子供たちを帰すと、ざっと目を通してあとはすぐかえり土、日と休み、大学に通ったり又自分の勉強をするのです、毎週水曜日に一回映画の時間

があって、その時は一人の先生が三組をもち、あとの二人の先生は室内の掲示とか、環境の整理とかの仕事にあたるというので、この映画もフィルムが充分にあり教育計画にふさわしい材料がえらべます。先生方の円満なあいだ柄というものが時間を生みだしているのでしょう。映写機ももち運びに便利な車にのせられてありますから、おっくうでなく取扱えます。デトロイト市の周辺では、フォード、ゼネラルモーター、等全アメリカの九五%の自動車(乗用車、トラックその他)を生産するとの事、大切な重工業地帯というわけで、毎月幼稚園も空襲避難訓練をしています。

教育委員会の指導主事が大学の教育学部の

ウイミングトン市の幼稚園を訪ねて



教授をかねておられたり、連絡がよく出来ていたと思います。

さすがにカナダの対岸だけあって早くから寒さがやって来ました。

近くのディアボーン市に、フォードの博物館があって、特にアメリカの歴史的な建物を移して村をつくった、グリーンフィールドグレイジにはエジソンの研究所とか、フォスタ

ーの住んだ家とかが集められていました。ドクタ・エドマンは十七名を、「私のこともたち」と呼んで、私たちもお互いはもとより、エドマンのことも姓でなく名でマリオンと呼びました。心の美しい方でしたから、私たちも又「お母さん」と呼んで慕っております。

ただ、どちらかといえば、アメリカが理想とする面、誇ってよい面を多くみせて下さったようです、第一次世界大戦終戦記念日の、午前十時に、土に眠る人々に祈りを捧げ、静かに「ドナ・ノビス・パッツェン」（ギイヴ・アス・ピース）の歌を歌って、かたく手を握りあい、教育を通して、世界の平和のためにつくそうと誓いましたのは今でもあざやかに記憶に残ります。

ハローウインのおまつり、中間選挙、サンクスギイヴイング等が次々にやって参りました、ナイヤガラの滝、ミシガン一周旅行等、さすがに規模の大きい風光を楽しみました。学校関係及それ以外の種々の会合に招かれ、日本のことについて紹介につとめました。

ウエイン大学におけるマリオンと17人の子供 // Dena Nobis Pachen //



◎デトロイト——シカゴ——ブルーミントン——ニューヨーク

十二月十七日の午饗会を最後に公式のデト

中列の中央が著者

ロイト生活を終り二三日整理をして、シカゴを通じてブルミントン（インディアナ州）でクリスマスをお祝いしました。ここには前年にフルブライト交換教授として日本に一年滞在なさったインディアナ大学のバリンジャー先生がいらして、日本語も達者でいらつしやることから、私たちの三ヶ月の印象について整理反省を助けて下さいました。

この静かな大学まちでは、二十四日の夜、救世軍が中心になって貧しい人々への贈物をするために、沢山のバスケット（籠）を用意してその家族に届け、食料や、おもちゃ等を整えていました。家族だけのお祝いのお料理をすませると子供たちは早くに床につきました。翌朝はツリーのまわりに友達や家族から贈られたプレゼントを開くのに早くから目をさまして大騒ぎでした。

ニューヨークでは、大みそかの「年越し」をみる事が出来ました。日本製だというおもちゃをガラガラ鳴らし、笛をビュビュウ吹き、風船をわり、ブロードウェイの商店はショーウィンドウの破損をふせぐ板をはって、タイムスクエアにあつまる人々の群にそなえ

ていました。

一月四日ユナイテッド・ネーションビル（国連ビル）を見学致しました。ちょうど、本年最初の安全保障理事会が開かれて、傍聴の機会が得られましたが日本も早く加入出来たらよいのと思いました。

◎ニューヨークーコロンムビア

ニューヨーク市で一緒に見物した先生方とわかれて唯一人、サウスカロライナ州の首府コロンムビア市に到着致しました。

ここには公立の幼稚園がないので教会設立の幼稚園に配属になりました。

スマイスさんという熱心なクリスチャンの家庭に、家族の一員のようにあたたかくもてなして頂いたのは本当に忘れられない経験です。又一週間づつではありませんが専心子供たちと一緒に暮した事は、多くの幼稚園を次々に学した事にもましてよかったです。教会がこのあたりのすべての活動の拠り所となし、一体となって、よい社会人となるための大事な、「宗教的な懂けい」を育てておるような

感じが致しました。アメリカ国民の合理性を愛する生活態度とその内部にあるキリスト教精神に僅か乍らふれ得たように思います。ひとりであっただけにまわりの方も心配して下さったでしょうし、私も身にしみて親切が嬉しかったので三週間の実習を終って次の任地にむかう時には朝から別れの悲しさがこみあげて、朝ひるの食事も溢れる涙にさまたげられる有様で、しゃくりあげ乍らウイミントン市に向けて車中の人となりました。

◎ウイミントン市——再びワシントンD・

C

ウイミントン市（デラウェア州）に公立幼稚園をみる為に一週間滞在しました。

この市の教育次長のクロスビー女史は体格も優れた精力的な活動家で、魅力的な仕事ぶりに感服致しました。次いでワシントンD・Cにかえり、この市の中にある児童研究所、私立学校、ティーチャートレーニング、カレッジ、及其の附属小学校等を見学致しました。さて最後の二週間、再び一堂に会した先生たちは各地での経験を語りあい、（44頁へ）

国立各一、私立一三、計一五園である。然し昭和二十七年、新しい日本の独立を境として急に幼稚園が増加していることを知るのである。本年四月一日までの三ヶ年間に公立七私立一七、計二四園が誕生しているのである。この間、丁度一ヶ月半に一園づつ増していることになる。これは不振であった岩手の幼児教育にとって劃期的な出来事である。尙現在各地で公私共に増加する勢にある。みちの奥岩手にもようやく幼児教育に光がさして来たようである。

幼稚園の現在の収容定員は、昭和二十九年四月の調によると、私立幼稚園に於ては定員三、一四九人、応募者四、三一三人、合格入園者三、四〇一人となっている。県下全体で約一千名の入園出来ないものがあることになる。然しその大部分は都市の子供である。例えば盛岡市に於ては、私立幼稚園の定員八一五名に対して昭和二十九年度の応募者は一、六五六人で約二倍強で半数以上の者が入園出来ないわけである。従って昭和二十七年頃から選抜が行われている。その方法は、所謂面談と称してメンタルテストや身体発育考査による選抜法、専ら抽籤による方法、願書受付

順序によって入園者をきめるもの等が主なものである。宮古市、一関市、久慈市等に於ても定員を超過し若干の選抜が行われているようである。都市部に於ては、何れもここ数年来希望者が激増して施設はそれに追つかない状況である。その他の地方に於ては大体希望者は全員収容されている。然しそれは施設の近くの人達だけである。遠い所の者や施設のない所の者はどうにもならないのである。

公立幼稚園の収容定員は、現在七園で約千名である。これ等も、何れも希望者を全部収容しきれない状況である。

昭和二十九年四月一日現在、県教育委員会の調査課の推定計算によると三才児の数は四〇、二五四人でそのうち入園者は一六二人、比率は〇、四〇二%である。四才児は四〇、八六〇人で、そのうち入園児は一、二二一人で、比率は二、七四%、五才児は四一、一九五人で、入園児は三、〇〇四人で、比率は七、二九%である。この外に現在岩手県には、六九の常設保育所があり、五、四〇〇人の幼児が収容されている。然しこれは社会事業としての収容であつて幼児教育としての幼稚園の施設並に被教育幼児は、極めて寥々たるも

のである。

岩手県の綜合開発や町村合併の推進されている折からでもあるので、これ等の進むにつれて幼児教育も急速な発展を見ることがあろう。

(岩手大学附屬幼稚園)

(57頁から)

最後の仕上

げの討論や、質問等、いわゆる評価の期間を終り、修了証書を頂いて、この研究集会の幕を閉じました。感想をまとめるころの英文のレポートはいささか頭を悩ませましたが、ともかく提出をすませると互いに再会を約して、米国のみでなく各国の先生方の理解と親愛を深めるこのプログラムが無事終了したのです。その日の午後ワシントンD・Cを出発日本の一行は、シカゴ、デンヴァ、ソルトレイク等を経てサンフランシスコからアメリカ船プレシデント、ウイルソン号で懐しの故園へむかいました。ハワイに一日寄港、三月十一日の夜明を待ち兼ねて登った甲板で燈台のあかりをみつめ乍ら胸をとどろかせる私達をのせて船は横浜へと接近して行きました。

(千桜幼稚園)